



人権通信

2023年度 第3号
城/内中等教育学校 人権委員会・レベラーズ部

こんにちは、人権委員会です。学年末考査も終わり、一気に春らしくなってきました。今年の徳島の桜の開花予想は3月25日と、例年より少し早くなるとの予想が出ています。

さて、今回は51・52・53・41・43・44ホームルームの人権委員の皆さんに、先日の人権映画会で上映された作品である『青い鳥』の紹介、及び感想を書いていただきました。

映画『青い鳥』(2008)

(あらすじ) 前学期、いじめられた一人の男子生徒が起こした自殺未遂で東ヶ丘中学校は大きく揺れていた。新学期初日、そんな2年1組に一人の教師が着任してくる。村内という男性教師の挨拶に、生徒たちは驚く。彼は吃音だったのだ。うまくしゃべれない村内はその分“本気の言葉”で生徒たちと向かい合う。そんな彼が初めて生徒たちに命じたのは、野口の机と椅子を元の位置に戻すことだった。そして毎朝、その席に向かって「野口君おはよう」と声をかけつづけた…

(みどころ) この作品は、重松清著『青い鳥』を映画化したものです。傍観者となったクラスメイトたちと吃音のある教師との交流を通し、いじめ問題に真正面から向き合った作品です。人が人に伝えようとする思い。それを聴こうとする思い。本当の責任とは何か。多くのことを問かける映画を通して自問してみてください。

(感想)

- 「人を思いやりなさい」「いじめは絶対だめ」と、軽々しく言う人は多いが、具体的にどのようにすればよいかを言う人は少ない。この映画からわかるのは、単純に「忘れよう」「もう絶対にしない」と言うだけでなく、どのように自分が頑張れるのかを常に考え、行動していくことが大切だということである。
- 村内先生はなぜ野口君の机を教室に戻したのか。それは最初のあいさつで、吃音を笑った生徒がいたことから、このクラスのいじめに対する反省はうわべだけで、いじめは根本的に解決していないと思ったからではないだろうか。いじめをなくすには、当事者だけでなく、周りの生徒や先生も、いじめに「本気」で向きあう覚悟が必要だと思った。
- いじめは「謝った」「反省した」ですまされるものではなく、いじめられた側はいじめた側には想像できないほどの苦痛を感じている。その事実は何れだけ謝ったとしても、反省の言葉を述べたとしても変えられないものである。だからこそ、これからの人生の中で、自分のしたことを心に秘め、背負って生きていく「責任」が必要だと思った。
- 僕はこの映画を通して、改めていじめた側の責任について考えることができた。いじめた側や傍観者の責任というのは、被害者に謝罪して、その事をなかったことにするのはなく、自分が相手にしたことを忘れずに、ずっと過ちと向き合いつづけることだとわかりました。いじめはないのが一番だと思います。
- 映画の中では語られてはいないけど、村内先生は吃音症のせいでいじめられた経験があり、それが生徒と真摯に向き合い、全力で話すようになったのではないかと感じた。話すことが苦手でも、村内先生のように一生懸命に伝えれば、相手の心に響くのだということがわかり、勇気をもらった。

- 映画の中に出てきた野口君のように、もし相手に自分の思いを伝えられず、ないがしろにされたら、どれほど息が詰まるような思いがするだろうかということが想像できた。村内先生の言った、本気で話す相手の言葉は本気で聞かなければならないという意味が、改めて理解できた。
- もし自分が吃音症だったら、それが原因でいじめられてしまい、学校に行く気力を失ってしまうかもしれないと思った。しかし、村内先生は「いろんな先生がいたほうがいいんだ」という信念のもと、そんなことは関係ないといわんばかりに勇気を持って生徒を指導していた。その姿を自分も見習いたい。
- 映画から、いじめとは誰かを嫌うことではなく、人を踏みにじって苦しめること、苦しんでいることに気づかないことだと知り、どんな相手でも踏みにじったり、嫌な思いをさせないようにすることが大切だと思いました。顔は笑っていても実は心で苦しんでいる人もいます。だから、相手の本当の気持ちを読み取ることが大切だと思いました。
- 自分も吃音症当事者です。小学校の時は、私の発表で小さく笑いが起きたり、しゃべり方をまねされたりすることはしょっちゅうでした。悪気がないとわかっているけど、記憶の片隅に残っていて、村内先生の「人の苦しみに気づかないこともいじめだ」という言葉が心に刺さりました。自分も人の苦しみに寄り添える人間になりたいです。
- 村内先生はあまり多くを語るのではなく、大切なことだけを言っている印象でした。自分もその場にいたら、いじめに気づくことができず、一緒にやっていたかもしれません。村内先生は、自分もいじめられたりしたことがあるからこそ、他人のいじめに気づくことができるのだと思いました。自分もやられたからこそ分かることもあり、その表現の仕方ひとつそれぞれなので、助けを求めているつもりでも相手に分かってもらえないこともあります。だから、クラス全体の雰囲気をよくするだけではなく、少し苦しいな、嫌だなと感じたら、すぐ誰かに伝えられる環境になればいいと思います。
- 僕は今までの人生の中で、いじめに気づいたことがありません。もしかしたら、周りでいじめがあったかもしれないし、そうではなかったかもしれません。ですが、いじめの加害者が負うべき責任の話には強く共感しました。被害者はいじめによって一生を台無しにされてしまうことがあります。そのことは自殺していても、していなくても変わりません。したかどうかならば、加害者もそのことを忘れてはいけなし、苦しみ、考え続けていかなくてはいけないと考えました。
- 吃音によってうまく喋ることができないこともあり、村内先生は大切なことしか喋らない。はじめは、彼の思いが生徒に伝わるのは、吃音だからこそ皆が注意して聴こうとしているからだと思っていたが、伝えることの難しさを彼が知っているからこそ、全力で話して伝えようとしているからだと感じた。本気の思いを伝えるのは、誰にとっても難しい。だが、思いが伝わった時、見える世界は広がっていくと思う。
- 私は今回「青い鳥」を視聴し、自分の考えだけで相手を判断してはいけないと思いました。今まで育ってきた環境は人それぞれであり、相手の気持ちになろうとしても限界があります。なので、人の意見を本気で聴くことが必要だと感じました。
- 今回の人権映画「青い鳥」では、加害者側の視点で見たいじめについて考え、自分たちが今まで感じたり、意識したりしたことのない加害者の「責任」について考えることができた。今回学んだことを生かして、自分はもちろん、周りの人々が被害者、加害者にならないよう努めたい。

51・52・53・41・43・44ホームルームの人権委員の皆さんの意見はどうでしたか？

また、この作品はDVD化され、レンタルもあります。ぜひ一度ご家庭でもご視聴いただき、ご家族で人権問題について考えたり、話したりしてください。

この人権通信が、人権について考えるきっかけになればと思います。

